

貧困状態にある子どもの非認知能力を育成する 学習プログラムの開発と効果検証および開発条 件に関する研究

柏木智子（立命館大学）

1. 本研究の目的

貧困状態にある子どもの非認知能力を育成するための学習プログラムの開発とその効果検証を行い、開発条件を検討することである。

非認知能力：意欲、自己肯定感、粘り強さ、批判的思考、創造力、協働性等の幅広い能力

2. 逆境に負けない力とその獲得環境について

- 学ぶ意欲やその他の活動や物事を成し遂げようとする意欲や粘り強さ、自己肯定感等を含むものとする。
- そうした力は、子どもが他者とのかかわりにより獲得するものとして捉える。
- そうした力を身につけられる子どもの重要な環境の一つである学校に着目することとする。また、学校の中でも他者とのかかわりを形成する授業や特別活動の中でどのように非認知能力を育もうとしているのかに焦点をあてて調査を進める。

3. 調査概要

- 3つの小学校においてフィールドワークおよびインタビューの質的調査、可能な場合のみ質問紙調査を実施。
- 調査時期は、2023年4月～2024年7月

小学校名	対象学年	就学援助率	調査内容
A小学校	全学年	20%	全学年の授業・特別活動・教員研修の見学・校長・教育委員会へのインタビュー・ドキュメント資料の収集
B小学校	5年生	30%	5年生の授業見学・教員・校長へのインタビュー・ドキュメント資料の収集
C小学校	5年生	15%	5年生の授業見学・教員へのインタビュー・ドキュメント資料の収集

4. 調査の結果：A小学校

•A小学校では、202X年度より、「すべての子どもの学びを保障する学校」を基本理念とし、みんなで学び、笑顔あふれ、安心して過ごせる学校づくりをめざして、対話型授業の積極的な導入。

→A小学校ではCOVID-19の影響もあり、これまでは子ども同士の対話をそれほど取り入れずに教員主導の一斉学習が多くなされてきた傾向にあった。そのため、当初は、教員からの反発もあった。

A小学校校長：着任して授業を見たらね、これはなんだと驚きでしたよ。グループワークがなくて、先生がずっと教えてるんです。このままではいけないと思って、授業をちょっと変えてみましょうと先生に提案しました。でもね、先生からしたら、そんな急に言われても、どうやって変えるんですかと。子どもたちにそんな急にできません。

4. 調査の結果：A小学校

- 校長の実践

- ①校長自身が授業を見て回りながら、教員が対話的な授業に取り組もうとする際に支援をすること
- ②その際にたとえ失敗してもかまわないこと
- ③教員研修を教員の負担にならないように実施すること
- ④教育委員会からの支援を求めること。

「子どもたちには、お互いに支え合い、聴き合いながら学び合う力を身につけてもらいたい、その中で仲間のことを考えられるようになってほしいし、そのことによって自己肯定感や学ぶ意欲を高めてほしい」との語りが幾度もなされた。

4. 調査の結果：A小学校

- 当初は反発していた教員もいたが、校長の語りに見られる子どもの姿に共感し、「子どもには人と関わりながら生きていってほしい」「周りに助けを求める力も必要」といった発言も徐々に増えていった。
- 上記の①や②を実施する中で、校長自身が教員のサポートを積極的に行い、教員同士での支え合いや助け合いを促す学校運営を行っていたことも影響を与えているようであった。

S教員：職員室がすごく居心地よくなって。今度授業こういうのしたいけど、どうしたらいい？って聞けるようになったし、校長先生が子どものことをよく見てくれて、こんなことができるようになってたねと子どものことをほめてくれるんです。それが一番うれしいです。

4. 調査の結果：A小学校

③の教員研修では、公開授業研究が行われたが、授業者に対してその他の教員から必ずお礼の言葉があり、すべての子どもの学びを全員でみとることにより、授業者が気づいていなかったり、考えていなかったりする子どもの学びの実態を共有するようになった。

T教員：授業を見せるって緊張するんですけど、他の先生から、〇〇さんがこんなふうに友達に話しかけたよ、〇〇さんは何もあのとき発言してなかったけど、実はここまで考えてたんだよ、と言ってもらえると、自分の気づいていないことに気づいてくれていることがとてもありがたいなと思うようになったんです。子ども同士でそんなふうに助け合ってたんだとか、自分は表面的にしか見てなかったけど、そんなところまで深く考えてたんだとかわかったら、次の授業の参考になりますし、がんばろうって思います。

→対話的授業の導入の際に、校長から教員への対話的なサポートにより、教員の同僚性の形成が促され、それを通じて子どもの学びに影響を与えていることが示唆される。

4. 調査の結果：A小学校

④の教育委員会の支援

A小学校校長：対話的な授業を教育委員会が大切にされていて、お金の補助をしてくれるんです。応募したんですが、それで、外部の講師に来てもらって、どういうふうに対話的な授業を行うのかを教えてもらったりしています。

4. 調査の結果：A小学校

A小学校の結果

- ・全国学力・学習状況調査項目にある、「自分にはよいところがあると思う」「人が困っているときは、進んで助けている」の肯定的回答が年を追うごとに増える。
- ・A小学校学校評価における「授業では自分で進んで学んでいる」「授業中、友達は自分を大切にしてくれている」における「とてもそう思う」の割合が1年で15%程度増えた。

4. 調査の結果：B小学校

- B小学校5年生の担任は、「助けてと言える力」「助けてと言われたら助けることができる力」を育てることをめざし、学級経営を行っていた。
- 授業の中でも、子ども一人ひとりに自分だけが問題を解ければよいとするのではなく、「まわりを見渡してごらん。自分が解けたらおしまいでもいいのかな」と問いかけ、子どもが他者の困りごとに関心をもてるように、加えて授業中でも立ち歩くことを認めて、子どもが自ら誰が困っているのかを見てまわり、助け合えるように取り組んだ。
- こうした助け合いが一方的なものにならないよう、授業の課題にも正解のないものを取り入れたり、特別活動にて困難を抱える子どもが取り組みやすいものを設定したりして、助け合いが双方向になるように工夫を行っていた。さらに、困っている子どもの授業中の発言を拾い上げ、「〇〇さんがこれを言ってくれたから、次に△△さんがこんなこと言ってくれて、考えがつながっているのがわかりますね」と相互作用により学びが深まることを価値づけていた。

4. 調査の結果：B小学校

B小学校の結果

- 年度当初は、テストをしてもほとんど空欄で出していた子どもたちが、年度末には必ず何かを書いて埋めようと試みるようになり、テストに粘り強く取り組むようになっていた。
- この取り組みに対して、校長の理解はあるものの、学校全体での取り組みには至らず、また教育委員会の支援もあまり見られず、調査後にこの活動が継続して見られることはない状態であった。

4. 調査の結果：C小学校

- ・C小学校5年生の担任は、子どもの非認知能力の中でも、子どもが
ありのままの他者を受け入れ、尊重する力を重視する学級経営を
行っていた。
- ・その中では、子ども一人一人の「弱さ」を重視し、「弱くてもい
いんじゃないか」と語る場面が多く見られた。そして、弱いからこ
そ、他者とつながりあえることを示す国語の教材に取り組んだ。

4. 調査の結果：C小学校

C小学校の結果

- ・子どもが弱くてもいいと思えるようになる、「そのままの自分でもいいんじゃないかな」「まあ、今、こんな感じでいようかな」と子どもがありのままの姿で学級にいやすくなくなった様子が担任から語られるようになった。
- ・結果として、特性を抱える子どもへの学級の包摂力も高まりつつあった。
- ・本校では、校長の理解と支援を受けて教員研修が行われ、こうした取り組みは学年や異学年でも少し取り入れられるようになった。しかしながら、教育委員会からの支援はなく、校長の異動により、形骸化が危惧されている。

5. 考察

- 子どもの非認知能力を育む学習プログラム：
 - ・対話的な授業の導入
 - ・子ども同士の助け合いとそれによる学び合いの双方向的促進
 - ・弱さの受け入れとありのままの存在の承認
- 効果検証：
 - ・自己肯定感や学び等の意欲の向上促進
 - ・他者を大切にする経験の蓄積

5. 考察

○条件：

- ・校長の支援的リーダーシップ
- ・学び合い支え合う同僚性の構築
- ・一教員の授業を他の教員で支援する研修の実施
- ・教育委員会の方針・資金的支援